

「今日一日を生きる」（マタイ六章二五〜三四節）

## 1 今日を生きる

先月、七月二四日から、キリスト教学校の日として、イエスの「山上の説教」を取り上げてきました。今日が最終回です。

今日はマタイによる福音書第六章、見出しでは「思い悩むな」となっている箇所です。「思い悩む」という言葉、一番新しい翻訳の聖書（協会共同訳）では「思い煩（わずら）う」となっています。このほうが元の意味にも近く、日本語としてもこなれています。「思いわずらう」という言葉を今日は使います。

テレビなどで私ども、時々、スポーツ選手が、インタビュで、明日のことは考えていません、今日のこの試合、この一番に全力をつくします、と言っているのを聞くことがあります。

明日、明後日のことまで考えずに、目の前の一戦に集中する、まさにそれこそ試合に臨む心構えというものでしょう。

聖書にも、そうした生き方を奨励している言葉があります。それが今日の箇所の最後の言葉です。

明日のことまで思い煩うな。明日のことは明日自らが思い煩う。その日の苦労はその日だけで十分である（三四節）。

「明日のことまで思い煩うな」というのですから、要するに、今日一日に集中しなさい、今日一日をしつかり生き切りなさいということです。明日のことまで思いわずらわなくていいというのは、もちろん明日のことは神様が考えくださるからです。それが、この聖句で、言外に言われていることです。まことに力強い、また慰めに満ちたイエスの言葉です。

神様が考えてくださる、守ってくださいというのに、それが信じられず、失敗した例が、聖書にはたくさんあります。その一つの例が、マナ（マンナ）の話です。簡単に申し上げればこうです。

旧約聖書の出エジプト記に出てくる昔の話です。イエスラエルの民、その全部、数十万人が、モーセを指導者として奴隷の地エジプトを脱出したときのことです。出エジプトと呼ばれる出来事です。

民は荒地、砂漠の中を通って行くので、さっそく食べ物に困ります。そのとき神様は、天からパンを与え、また肉を与えると約束します。そして旅の間中、ですから四十年間、神はそれを実行したのです（出エジプト記一六章）。肉というのは鳥のうずらです。夕方になるといっばい飛んできたと書いてあります。天からのパンというのが、マナです。朝宿営に露がおり、それが蒸発すると、地表に白いものが残ったというのです。何かの植物でしょうけれど、白いマシユマロのようなものと私は想像しています。

人々は、モーセの命令に従って、毎朝、その日必要な分を集めたのです。ところが、ある人たちがそれを多く集めて、次の朝まで残しておいたというのです。もちろん腐って食べられなくなったのですが、モーセは自分の命令、つまり神の命令に背いたことで怒ったとあります。翌朝まで取っておこうとした人、どういうつもりであったか知りませんが、彼らが、何らかの意味で、「明日のことまで思い煩」ったことは明らかです。神様が明日また新しく与えてくださることを信じなかった、そしてそのために彼らは自分で何とかしようとした、与えられたもので、その日一日を生きようとしなかったのです。

## 2 空の鳥、野の花

しかし、そうはいわれても思いわずらうのが人間です。「思い煩い」と訳されている聖書の言葉は、心配する、気にかける、不安に思う、というよう意味で、ふつうに使われ言葉で、特殊なものではありません。私ども、あれやこれやの心配、不安、つまり、思いわずらいの中に毎日を過ごしています。思いわずらわない人間は一人もいませんし、思いわずらうことが悪いことだともいえません。ただ度を超してしまうことがあります。神様を信じないことで、そうなるてしまうことがあります。そのことをイエスはこう言って戒めています。

自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか（二五節）。

あなたがたのうちだが、思い煩ったからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか（二七節）。

何を食べるか、飲むか、何を着るか、こうしたことがまったくどうでもいいということではありません。しかし私どもが、神様から〈命〉をいただいている、命をになう〈体〉を、あるいは心をいただいているということ、もしこのもつと基本の事実をよく考えもせず、食べものや飲みもの、あるいは着るものことしか頭にないとしたら、あれこれ思いわずらうてるとしたら、本末転倒です。

命や体が、神様からいただいた大切なものである以上、健康といたらよいでしょうが、それも大切なことはいまでもありません。自分の命を保ち、神のために用いるためです。何のために自分が生き、かつ生かされているか考えることなしに、ただ自分の「寿命」のことで思いわずらっている人がいるとすれば、それもまた本末転倒です。

さてそうした思いわずらいという、一つの不信仰に陥っている人間に対して、思いわずらわない世界、そこに生きるものの姿を、イエスは私どもに語ってくださいます。それを見てみましょう。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、

あなたがたの天の父は鳥を養ってください。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか（二六節）。

野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってください。まして、あなたがたはなおさらのことではないか（二八〜三〇節）。

イエスは、人々の前に、思いわずらうことなく暮らしている、いわば私どものお師匠さん（先生）を紹介しています。それが「空の鳥」「野の花」です。

空の鳥を「よく見なさい」、野の花を「注意して見なさい」と、イエスは言っています。たんに見る、眺めるではありません。しっかりと見る、じっと見る、そして考えてみなさいということです。

イエスはこれらを人間に対比させています。「空の鳥」は、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうか思いわずらっている人間と何と対照的なことでしょうか。「野の花」は、自分の体のことで何を着ようかと思わずらっている人間と何と対照的なことでしょうか。

もちろん、例えば空の鳥は、食べ物求めて、いわば働いています。じつさい朝早くから夕べに至るまでどれほどかいがいしく働いていることでしょうか。しかしこの鳥の「働き」は、人間のそれと同じではありません。神ご自身が食べ物を予めそこに置いてくださなければ鳥は見つけ出し、受け取ることはできないのです。すなわち神が毎日、必要なものを、今日はじめに紹介した、あの旧約の天のパン、マナのように備えてくださって、養ってくださるのです。そのことが、私どもに見えてこなければならぬのです。

空の鳥も、そして、今日は詳しくは申しませんが、野の花も、そのままの姿で、彼らを生かしている方、すなわち、神の見えざる支えを、神の見えざる憐れみを証しているのです。それゆえ彼らは、明日を思いわずらう私どもと対照的に、今日という一日を生きているのです。

### 3 身軽に生きる

こうして私ども、イエスによって、周りの世界をよく見、よく考えるように求められています。そうです。私どもの外の世界です。イエスは、自分の心をのぞき込むのはやめなさいということです。自分に、ではなく、外に、広く目を向けてみなさいということです。

外の世界では、神の恵みのご支配がなっています。神の憐れみが世界に及んでいますが（五・四五）。そのことを人は忘れて、思いわずらうのです。まるで恵みの支配が自分だけに及んでいないかのように、です。

そうではないのです。外では神の支配が厳としてそこにある。太陽は東から出て西に沈む。そうであるなら、その神の支配は、あなた自身を、あなたの人生をも貫いて

いるはずで。神の恵みは、私をも貫いているのです。人間も自然の外で生きているわけではありません。

この自然も人間も、造られたものすべてが神の恵みのもとにあります。いや、それ以上のことを私も考えなければなりません。人間は、鳥よりも価値あるもの、かけがえないものなのです。人間を、野の花以上に神は恵みによって装ってくださるのではないのでしょうか。そうであるなら、その神の恵みを信じ、思いわずらうことなく歩むべきなのです。

はじめに、人間は毎日思いわずらいの中にいる、いつまでたっても解放されることはないと申しました。人間は思いわずらう動物であります。この思いわずらい、よく考えればつねに明日のことに関わります(ボン・ヘツファー)。まだ起こっていないことに関係いたします。そうではないでしょうか。明日のことについて、明後日のことについて、その成り行きはだれにも分からない。それゆえ私どもは心配し、不安になり、根拠のない希望でそれらの不安をまぎらわそうとしたり、できたら考えないようにしたり、つまり考えないようにしようと考えることになります。それは年齢には関係ありません。歳をとっていれば思いわずらいがなくなるのでもありません。若い人は思いわずらいが少ないのでもありません。

思いわずらいは、いつもに明日に関わっているゆえに、明日がなくなる日にはじめて人間の思いわずらいは止みます。それゆえ、思いわずらいと共に、その中で、私どもも過ぐす以外にないのです。

初代のキリスト教の二人の使徒ペトロとパウロも思いわずらいについて語っています。一人とも、今日私どもが見てきたイエスの山上の説教を受けとめて、その上で語っているのです。

思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけ  
ていてくださるからです。(ペトロ一・五・七)

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願  
いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知  
を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守る  
でしょう」(フィリピ四・六・七)。

ペトロもパウロも、人間が思いわずらいにとらえられていることを、よく知ってい  
ました。それゆえペトロはそれを神に投げかけるように言っています。パウロもすべ  
てを神に打ち明けることを勧めています。重荷をすべて神様にお委ねすることです(詩  
編五五・二三)。そのような者たちに「人知を超えた神の平和(平安)」があること  
をパウロは語っています。

こうして使徒たちもイエスの山上の説教に向き合ったのです。それを受けて、その  
ように私どもに勧めるのです。思いわずらいを神に委ね、身軽になって、与えられた  
今日一日を生きたること、これこそ、イエス・キリストが、聖書が、いまでも私どもに示  
しているイエスに従う者の生き方です。